

《書評》

月本昭男 編著

『宗教の誕生：宗教の起源・古代の宗教』

山川出版社、2017年

藁科 智恵

WARASHINA Chic

本書は、「宗教の世界史」シリーズの第1巻である。このシリーズは、ただ各宗教の歴史を描くのではなく、人びとが生活の中で宗教をいかに生きたか、各地域に展開した宗教がいかに人類の歴史に関わってきたかといった視座から、「歴史のなかの宗教」を考えることが目指されている。このシリーズの第1巻である本書は、シリーズ全体の試みの出発点を提示するという位置付けがなされうるだろう。

本書は、2部構成となっている。第1部「宗教の起源」では、宗教学の展開の中で用いられてきた術語を各論者が取り上げる。第2部「古代の宗教」では、人類の歴史に大きな影響をもたらした古代諸宗教が論じられる。以下が目次である。

序章「宗教の誕生」月本昭男

第1部「宗教の起源」

第1章「フェティシズム」田中雅一

第2章「アニミズム」平藤喜久子

第3章「トーテミズム」竹沢尚一郎

第4章「シャマニズム」佐藤憲昭

第5章「祖先崇拜」鈴木岩弓

第2部「古代の宗教」

第1章「メソポタミアの宗教」月本昭男

第2章「エジプトの宗教」近藤二郎

第3章「イスラエルの宗教」山我哲雄

第4章「インド・イランの宗教」後藤敏文

第5章「ギリシア・ローマの宗教」松村一男

個々の議論を紹介する前に念頭に置いておきたいのは、「宗教の起源」への問いをめぐる歴史的・知的状況である。この点を踏まえて初めて、本書の構成が明確になるだろう。個別の諸宗教の歴史、あるいは人類に普遍的な現象としての「宗教」の起源を探求することはさまざまな学問分野において行われてきたが、特に後者に関する研究がさかんに行われたのが、宗教学の草創期である19世紀であった。啓蒙の時代に展開された宗教起源論は、その後19世紀半ばから形成され始める宗教学に受け継がれる。この宗教起源論は当時広く受容されていたダーウィニズムの後ろ盾を得て、進化論的図式で論じられることとなる。第1部「宗教の起源」においては、そういった学問状況において生まれた諸術語が扱われる。もちろんその際には、進化論的価値づけを帯びた歴史性を相対化した上で、これら術語が「宗教現象の本質的側面に迫る概念装置として今日に受け継がれた」（7-8頁）ものとして論じられる。つまり、「宗教概念批判」の一部に代表されるような、ある特定の概念の歴史性を強調し、そのことによってその概念自体の有効性を否定するというのではなく、その歴史性を認識した上で、概念の普遍性を捉えようとする試みであるといえる。

上述のような19世紀を中心に展開された西洋中心主義的な宗教進化論は、その最終段階に一神教を据えたが、その逆に一神教こそ宗教の最古の形態であると考えた人々も、19世紀末から20世紀初頭に現れた。この他にも一神教の成立をめぐる、風土論的説明、創唱宗教説といった見解が提示されてきたが、一神教の成立の説明に成功しているとは言い難い。そこで本書の後半である第2部「古代の宗教」では、考古資料に基づいて、世界の諸宗教に多大なる影響を与えた古代の宗教がいかにかに成立・存在していたのかということを当時の人々の生活の中で描き出す。このことによって、「古代宗

教にみる普遍性と地域的特色を解明するために、本巻がささやかな最初の一步になること」(13頁)が目指されている。

次に、それぞれの章の内容を紹介していく。

第1部第1章では、宗教、経済、性という領域において展開してきた「フェティシズム」という概念の歴史、その現代における意味が論じられる。宗教起源論において語られる「フェティシズム」は、「未開」と「文明」という二項対立的な前提において使用されたが、マルクス、フロイトはこのような前提に疑義を唱え、同時代を捉える上で「フェティシズム」概念を用いる。さらに論者は、現代日本の文化社会現象を捉える上でのこの概念の可能性について論じる。

第1部第2章は、「アニミズム」概念の学説史、そしてこの概念の日本における展開、今後の展開可能性について論じる。「アニミズム」の日本における展開では、タイラー自身の日本への言及についても論じられる。論者は、19世紀の進化論的な図式における「アニミズム」概念の問題性を指摘しつつも、20世紀後半から大きく展開している生物学・進化心理学に触れ、「宗教現象の始まりの問題」を捉える上でのこの概念の持つ可能性について論じる。

第1部第3章は、「トーテミズム」をめぐる学的関心の変遷を追った上で、それを今日取り上げる意味について論じる。世界各地で報告された民族誌的事実としての「トーテミズム」に対し、それを宗教の起源とする議論が起こった。その後、社会・文化人類学によって分類的思考の起源として「トーテミズム」が取り扱われることとなる。論者は、レヴィ＝ストロースによる議論以降、文化人類学における理論的な展開が見られないという事実に触れた上で、「トーテミズムに対する関心の終焉は、差異から出発する学問としての文化人類学の終焉を予告していたのではないだろうか」(64頁)と指摘している。

第1部第4章は、「シャマニズム」の脱魂型、憑霊型といった定義から展開された議論、日本における研究の展開を紹介しながら、さまざまな調査を基にその現象の多様性について論じ、今後の研究における見通しを提示す

る。論者は、日本においては霊媒型シャマンに焦点が当てられ、その他の型のシャマンが視野に入れられてこなかったことを指摘し、さまざまな型の存在を前提として研究を進めていくべきとする。

第1部第5章は、「祖先崇拜」「先祖祭祀」という概念の日本における使用、その背景が論じられる。日本において、「祖先崇拜」という語は戦前から特に社会科学において、通文化的視座に力点を置いて用いられるのに対し、「先祖祭祀」は社会学の一部、民俗学において、日本文化内部でこの現象を理解するという関心の下で用いられてきたことが指摘される。両概念がこのように導入、使用されるようになった日本とヨーロッパの背景が詳細に論じられる。

第2部第1章「メソポタミアの宗教」では、古代文明発祥の地とされる西アジアにおいて、古代メソポタミア文明を築き上げ、継承してきた人々の宗教観念、宗教的行為を楔形文字資料に基づいて詳細に論じられる。神々の表象、神話、儀礼、民間信仰といった側面から当時の宗教形態が明らかにされる。

第2部第2章「エジプトの宗教」では、古代エジプトの宗教形態が、発掘された遺跡、遺物を基に、神々の表象、太陽信仰、オシリス信仰、天地創造神話、死生観といった観点から、描き出される。

第2部第3章「イスラエルの宗教」では、1章、2章で論じられた二大文明の間に置かれた一つの弱小の民にすぎなかったイスラエルの民の間で、いかにして唯一神観が確立されたかが、ヘブライ語聖書、考古資料を基にして詳細に論じられる。その際、「拝一神教 (monolatry)」「唯一神教 (monotheism)」という区別を用いることにより、その過程が鮮やかに描き出されている。

第2部第4章「インド・イランの宗教」では、この地域に興った宗教をヴェーダとバラモン教、ゾロアスター教を中心に、その聖典、世界観、社会制度、儀礼を参照しながら詳細に論じられる。また、この地域の宗教は、メソポタミア、エジプトにおける宗教が紀元前後に消滅していくのに対し、その後も連綿と受け継がれる。この章では、この地域の宗教が受け継がれた仏

教、マーニー教についても触れられる。

第2部第5章「ギリシア・ローマの宗教」では、その歴史の変遷が両伝統の神話、当時の政治体制、社会制度を背景として詳細に論じられる。小規模なポリスを基盤とするギリシア宗教、最終的には世界帝国において展開するローマ宗教という違いはあるものの、ローマ帝国に継承されたギリシア宗教の伝統は、帝国内で諸宗教との習合を経て多様な様相を呈することとなる。このローマ世界にキリスト教が浸透し、国教化される。

本書の構成は以上のように、前半においては宗教学における諸術語をめぐる検討、後半においては古代の宗教の様相を詳細に論じるという形を取っている。本書を読んで気づくのは、前半における企図に対する答えが十分に明確に提示されているかという点で、若干の疑問が感じられるということである。第1部では宗教起源論において用いられた術語を「宗教現象の重要な諸側面がそれらをとおして照らし出され、そこから二十一世紀に生きる人類と人類社会の一端が照らし出されることになる」(8頁)ものとして捉え直すことが目指されるが、それぞれの論考においてその可能性は示唆されてはいるものの、明確にはなっていないように思われる。ただし、この作業は宗教学に携わる者全てに課される課題であろう。

最後に、本書に通底している問いについて触れたい。その問いとは、序章においても述べられている問い、「宗教とは何か」であろう。もちろん、「宗教」という概念が何を意味するかは、論者によっても、その企図によっても、変わるものである。それを踏まえた上で、「日常の生活世界を超えた、不可視の存在とその世界を前提にする」(14頁)という特質を持った人間の行為として、時代・地域を超えた普遍的文化現象としての「宗教」を捉えようとする営みが、宗教学の営みである。本書は、諸宗教をその普遍性と固有性において理解したいという関心を持つ幅広い層の読者にとって魅力的なものであるだけでなく、宗教学を学ぶ人々にとっても、改めて「宗教とは何か」について考える刺激を与えてくれるものである。また、「歴史のなかの宗教」を人々の生活において描き出すことを企図した本シリーズの刊行は、宗教をめぐる起きているかに見える現代社会の読み取り難さを、そのより

本質的な視点からより深く理解するという意味で極めて時宜を得たものであるといえよう。

(本学兼任講師)